

だんしはしんだわかってた②

西をさむ

ふるさとの町に坂無し冬椿 真砂女

真砂女さんが房総半島の鴨川生れと知らなくとも、一瞬にしてこの町の様子を思い浮かべる事が出来るでは有りませんか。坂の無いその土地の家々の佇まいや、其処で暮らして居る人々の息吹までもが聞こえて来ます。その上、冬椿が厳しくもあり明るくも有るこの地の人情を言い表している様です。

さて、談志は「落語とは人間の業の肯定である」と言いました。二足歩行を始めた私達の祖先が、自分たちのコミュニケーションの方法として言葉を使い、文字を発明して、人を救ったり、時には危めたりもする肉体へと変貌していったのです。

善悪、醜美、虚実、喜怒、哀楽等、総ての事実には裏と表があり、この考えはどちらも間違っていないというのが談志の心根ではないでしょうか。私達もよく考えて見る必要が有りそうです。

明ぼのやしら魚しろきこと一寸 芭蕉

三代目、桂三木助が、枕にこの句を使った落語に「芝浜」が有ります。江戸の風情を感じさせ、棒天振りの魚屋の話へと持って行くとは上手く考えたものです。

大酒呑みで怠け者の夫、勝五郎を女房が立ち直らせる人情噺ですが、終りの所で普通は、勝五郎から女房への感謝の気持ばかりが強調されていますが、談志は違う方法で演じています。女房の科白に次の様な所があります。「お前さん、こんな私を嫌になったかい、わたしゃお前さんが好きで好きでどうしようもないんだよ、どうか私を見捨てないでおくれ」。まあ、こんな風だったと思いますが、笑っていただけませんね。心底泣けて来ます。

哀しみの上にある人生のおかしさその物を語っている様です。

初鶏の声より先に山の神

良い月だやっとな気が付くスキヤ橋

うちの子でない子がいてる昼寝覚め

「滅亡寸前の上方落語の中興の祖」と言い、談志が兄貴と呼んで一目置いていた、「米」をばらばらにした俳号、八十八（やそはち）を持つ桂米朝さんの句の中から選んでみました。三つ目は、あの鷹羽狩行さんが絶賛したと言われている句だそうです。

歌舞伎役者や文豪、はた又噺家など、有りとも有らゆる人々に親しまれて来た俳句が、滅亡の寸前まで来て居る様に思えてなりません。今盛んに作られて居る俳句が、万に一つだに後世に残るとは考えられないのです。何とかしなくてはなりません。おや、米朝が何か言うてはるみたいですね。

「厚かましくも、こんな所へちょこんと座って人様を笑わせ、おまけ

に金までもろうて、こんなええ商売あらしまへんわ。その挙句、人間国宝
でっせ。あんたはん等も滑稽句

とやらをやってはるみたいやけど、それ本真に文化勲章への近道かもしれ
へんで。あんじょうしいや。

ところで、皆さん、奈良の大仏っあんも国宝やけど、わてとどっち
が偉いと思わはる？そら、わてでんがな。先方さんは疾うに死んではるで」。